

感情語の選択と人間らしさの認知¹

Emotion word choice and the recognition of humanity.

人間社会学科 波多野

純

問題

動作と認知の無意識的な影響関係

近年、身体動作が感情や記憶、態度、さらにより高次の認知活動との間に示す無意識的な影響関係についての研究が活発になり、体現的認知 (embodied cognition) の研究としてひとつの領域を形成している (レビューとして Niedenthal, Barsalou, Winkielman, Krauth-Gruber, & Ric, 2005; Semin & Smith, 2008)。そこに含まれる現象は多様で、たとえば腕を使った接近一回避動作による刺激語判断の促進や抑制 (Cacioppo, Priester, & Berntson, 1993)、それと同様の動作による説得効果の変容 (Brinol & Petty, 2003)、「高齢者」カテゴリの活性化による歩行速度の変化 (Bargh, Chen, & Burrows, 1996)、頬骨筋の操作による映像判断のちがひ (Strack, Martin, & Stepper, 1988) など、さまざまな動作および認知内容がとりあげられている。

しかしそれらの研究は、比較的単純で直線的な影響関係を検証するものであり、特定の動作と認知との間に仮定された自動性の存在を確認する試みが多かったように思われる。これに対して一部の研究者からは、実験でもちいられる動作の意味づけを固定的に考えることに疑問や異なる見解も提示されていた (たとえば Eder & Rothermund, 2008; Neumann & Strack, 2000)。Eder & Rothermund (2008) は、体現的認知研究で早期からもちいられてきた接近一回避動作の適合性効果 (Förster & Strack, 1996) を、「評価的コード化説 (evaluative coding view)」によって再検討している。適合性効果は、刺激語の快-不快判断をレバーの押し引きで反応する課題において、腕を引く動作 (接近) が肯定的な刺激、腕を押し出す動作 (回避) が否定的な刺激と組み合わせられた時に処理が促進される (そして組み合わせが逆転すると抑制される) という現象である。しかし Eder & Rothermund (2008) は、それぞれの動作に付与するコードを変更することで、効果の方向 (促進・抑制) が変化することを示した。これらの指摘は、動作と認知の関係が、初期の体現的認知研究で想定されていたよりも固定的ではなく、動作に対する意味づけが変更されることによって、以前にはなかった新しい影響関係が生じる可能性を示唆している。また評価的コード化説の見方に立てば、動作の効果はある程度操作可能であると見ることもできるため、より複雑な社会行動を体現的認知の枠組みから理解することも期待できる。

1 本研究は、平成21年度文部科学省科学研究費補助金を得て行なわれたものである。[挑戦的萌芽研究 課題番号20653049]。

次項では、その具体的な例を組織的有害行為の研究に見出し、漸進的攻撃による他者認知の変容を体系的認知の枠組みで考察する。

組織的有害行為と他者認知の変容

組織が社会や個人に与える負の影響は、さまざまな学問分野の関心を集めてきた（たとえば Arendt, 1963; Bauman, 1989; Darley, 1996; Opatow, 1990）。個人の行為とはちがいが、組織的な有害行為は分業によって成立するため、必ずしも個々の成員に明白な悪意があるとは限らないという複雑な側面をもっている。その極端な例が、Arendt (1963) によって「悪の陳腐さ (banality of evil)」と形容されたナチによるホロコーストであろう。Bauman (1989) は、大規模な虐殺の実現に不可欠だったのはナチの有害な意図そのものよりも、個々の成員による徹底した効率性の追求であったと分析している。ところがそこで観察される悪は、組織全体として高い効率性を実現している反面、他者に与える影響を過小評価したり見落としたりするような、軽率さや不注意を示している (Hamilton & Sanders, 1999)。深刻な被害をもたらす行為において被害が軽視されることは、不可解であると同時に、残虐行為の無自覚な実行というきわめて重要な問題を提起している。

では、何が被害の軽視を生み出すのであろうか。Bandura (2002) や Staub (1989) は、組織的残虐行為の過程で生じる被害者の非人間化を重視している。すなわち、被害者を人間以下の存在と認知することで被害者への共感的感情が低下し、残虐行為の実行に対する抵抗感を軽減することが示唆されている。そして、非人間化を促進するメカニズムのひとつとして Bandura (2002) や Staub (1989) は、漸進的攻撃の効果をあげている (Milgram, 1974も参照)。漸進的攻撃とは、実行者にとって感情的に許容できる程度の攻撃行動を、徐々に強めながら進展させていくことであり、被害者に適用される道德基準を少しずつ低下させる効果をもつとされている。重要なのは、攻撃行動を激化させる過程で被害者を人間らしい存在とみなさなくなり、それがさらに攻撃を容易にするという、行動と認知変容の相互促進的効果をもつことである。ここに、体系的認知における動作と認知の現実的で複雑な影響関係を見ることができよう (反復的動作が偏見や差別に与える影響については Kawakami, Phillips, Steele, & Dovidio (2007) を参照)。

では、他者（被害者）を人間らしい存在とみなさなくなるという現象は、心理学においてどのように検討されてきたのであろうか。

非人間化の研究

通常であれば心理的負担が大きく実行困難と思われる行為の背景に、被害者の人間性を否定する非人間化 (dehumanization) のメカニズムがしばしば指摘されている (Bandura, 2002; Bar-Tal, 1990; Castano & Giner-Sorolla, 2006; Staub, 1990a, b)。非人間化は残虐行為研究の文脈で古くから見出されていたが、近年になって研究が増加している。その中で、Leyensらによる下等人類化

(infra-humanization) の研究は、集団間関係における非人間化の一形態として新たな実証研究の方法を提案している (Leyens, Paladino, Rodriguez, R.T., Vaes, Demoulin, Rodrigues, A.P., & Gaunt, 2000; Leyens, Rodriguez, R.T., Rodrigues, A.P., Gaunt, Paladino, Vaes, & Demoulin, 2001)。

下等人類化は、外集団成員が内集団成員に比べて人間らしい感情を保有していないと認知するバイアスである。下等人類化の研究では、人間と非人間とを分ける特徴として感情に注目し、人間と動物に共通な 1 次的感情 (primary emotion) と、人間らしい複雑な感情である 2 次的感情 (secondary emotion) の区別を研究に用いている。2 次的感情には希望や共感のような肯定的感情と、屈辱感や罪悪感などの否定的感情が含まれる。これに対して 1 次的感情とは、驚き、快、恐怖、怒りなど動物にも観察されるような感情である。Leyens et al. (2000) は、これらの感情リストを調査協力者に提示し、内集団と外集団を表すのにふさわしいと思う感情をそれぞれ選択させた。その結果、2 次的感情は外集団よりも内集団を表す感情として選択される傾向にあったが、1 次的感情ではそのようなちがいが見られなかった。下等人類化の研究が明らかにしたのは、感情全般ではなく、より人間らしいとされる 2 次的感情だけでバイアスが観察されるという事実である。下等人類化の理論では、外集団よりも自分たちを人間らしいと認知する傾向が、2 次的感情の帰属に差を生みだすと考えている (Gaunt, Leyens, & Demoulin, 2002; Vaes, Paladino, Castelli, Leyens, & Giovanazzi, 2003; Viki & Abrams, 2003)。

さらに近年、Haslam (2006) が非人間化の中に 2 つの形式を見出して研究を拡張した。他者のどのような側面が否定されるかによって、非人間化は動物的非人間化 (animalistic dehumanization, 以下「動物化」) と機械的非人間化 (mechanistic dehumanization, 以下「機械化」) に区別されている。動物化とは、「人間に固有の特徴 (uniquely human: UH)」を否定し他者を動物に近い存在と見なすことである。それに対して、機械化は他者の「人間的性質 (human nature: HN)」を否定し、石やロボットのように不活発で温かみのない存在と見なすことである (Haslam, 2006; Haslam & Bain, 2007; Loughnan & Haslam, 2007)。そして、動物化が嫌悪感をともなって他者の自律性を否定する傾向であるのに対して、機械化は他者への無関心と情緒的結びつきの拒否をもたらすことが指摘されている (Haslam, 2006)。Haslam による一連の研究は、他者への無関心を引き起こすような非人間化の形式を示唆している点で、有害行為における他者 (被害者) の軽視を考えるための重要な視点を提供している。しかし下等人類化も含めて非人間化の研究は、まだ日本でほとんど行われていないため、同様の結果が日本語の感情語でも得られるのかを検討する必要がある。

本研究の目的

以上にもとづき本研究は、漸進的攻撃が被害者に対する認知の変容を促すという上述の問題を扱うための予備的研究として、先行研究で確認されている非人間化を日本語で確認することを目的とする。具体的には、有害行為の加害者と被害者を、下等人類化および動物化と機械化の指標によっ

て識別することを試みる。ただし、現実の有害行為の調査は困難であるため、比較的身近な有害行為であるいじめを材料として、大学生を対象に探索的な調査を試みる。いじめについてはすでに多くの研究がなされており、豊富な蓄積があり（レビューとして神村・向井, 1998; 森田・清水, 1986; 鈴木, 2000）、その中には非人間化に相当すると思われる行為を数多く見出すことができることから（深谷, 1996; 中井, 1997）、本研究の材料として適切であると思われる。

研究1では、下等人類化研究の手続きを用いる。いじめの加害者と被害者の人物像を想像させて比較し、2次的感情の帰属に差が見られるかを確認する。いじめは一般的に道德規則から逸脱した行為であるため、そのような行為の実行者である加害者は、被害者に比べて異質な存在とみなされるように思われる。よって研究1の仮説は次のようになる。

仮説1：人間らしい2次的感情は、いじめの加害者よりも被害者に多く帰属される。一般的人物像においては、いじめ加害者が下等人類化されている。

研究2では、Haslam (2006) の動物化と機械化の概念を用いて、いじめの加害者・被害者・傍観者の人物像を比較する。研究2では2種類の非人間化が誰に対して顕著に見られるかを検討する。動物化の指標は加害者の攻撃性や暴力性を反映する一方で、機械化の指標は被害者が非人間化される可能性を示すように思われる。それに対して、傍観者に対する顕著な非人間化は生じないであろう。よって研究2の仮説は次のようになる。

仮説2：いじめの加害者は人間に固有の特徴（UH）を低く評価され、動物化された人物像を示す。それに対して、いじめ被害者は人間的性質（HN）を低く評価され、機械化された人物像を示す。傍観者にはそれらの傾向が示されない。

研究1

目的

研究1では、下等人類化の指標によっていじめの加害者と被害者の人物像を比較し、感情語の帰属に差が見られるかどうかを検討する。

方法

被験者 静岡県内の私立大学学生149名（性別不明）

要因計画 2（対象：いじめ加害者・被害者）×2（感情語の種類：1次的感情・2次的感情）×2（感情価：肯定的・否定的）要因計画。すべて被験者内要因であった。

質問紙の構成 質問紙は、後述のような感情語の評定課題と、感情語の選択課題で構成されていた。感情語はViki & Abrams (2003) やVaes et al. (2003)などを参考に、1次的感情語と2次的感情語を10語ずつ合計20語選んだ。それぞれは肯定語5語と否定語5語を含んでいた。1次的感情・肯定語は「喜び・驚き・好意・楽しみ・興奮」、1次的感情・否定語は「怒り・恐怖・いら立ち・苦しみ・痛み」、2次的感情・肯定語は「希望・勇気・愛情・優しさ・楽観」、2次的感情・否定語は「罪

悪感・恥・失望・憂うつ・嫌悪」であった。感情語の評定課題では、ランダムに配置された感情語について、それぞれの語がどの程度人間らしい特徴だと感じるかについて、4件法で回答を求めた（1:「完全にヒトと動物に共通の特徴である」、2:「ある程度ヒトと動物に共通の特徴である」、3:「ある程度人間独自の特徴である」、4:「完全に人間独自の特徴である」）。感情語の選択課題では、「イジメに関連してあなたがイメージする人物像を教えて下さい」と教示し、加害者と被害者について、それぞれの特徴を表すのにふさわしいと思う単語を一覧の中から選び、チェックマークを付けるよう求めた。感情語は、先に評定を求めたものと同じ20語がランダム化され5行4列に配置されていた。

手続き 心理学関連科目の授業中に質問紙を配布し、後日回収した。教示はすべて質問紙上に書かれていた。下等人類化の先行研究（たとえばViki & Abrams, 2003）の手続きと同様にするため、感情語の選択数なるべく7～10語程度にするよう教示した。

結果

質問紙を配布した149名のうち104名が実験に協力した。104名の中で記入に不備のあった2名分のデータを感情語の評定分析から除外し、さらに感情語選択課題を実施していなかった1名分のデータを除外した。したがって、感情語の評定では102名のデータを、感情語選択課題では101名のデータを分析に用いた。

感情語の評定の分析 感情語の人間らしさの評定値に対して、1次的感情と2次的感情に分けて信頼性係数（Cronbachの α ）を算出したところ、1次的感情では $\alpha=.79$ 、2次的感情では $\alpha=.80$ であり、十分な信頼性が得られた。そこで、感情語の種類（1次的・2次的）と感情価（肯定的・否定的）によって語を分け、人間らしさについての評定平均値を算出した。この平均値に対して、2（感情の種類：1次的感情・2次的感情） $\times$ 2（感情価：肯定的・否定的）の分散分析を実行した。その結果、感情語の種類の主効果が有意であった（ $F(1, 101) = 571.73, p < .001$ ）。2次的感情は1次的感情に比べてより人間に固有であると評定されていた。この結果から、先行する諸研究と同様に、本研究の被験者が2次的感情をより人間らしい感情であると認知していたことが確認できた。さらに、感情価の主効果も有意であった（ $F(1, 101) = 89.06, p < .001$ ）。ただし、Viki & Abrams (2003)の結果とは逆に、否定語の方が肯定語よりも人間に固有であると評定されていた。交互作用も有意であった（ $F(1, 101) = 81.52, p < .001$ ）。交互作用の検定の結果、Viki & Abrams (2003)と同様に、1次的感情における感情価の効果が有意でなかった（ $F(1, 202) = 0.05, n.s.$ ）以外は、 $p < .01$ で有意であった。2次的な否定的感情がもっとも人間に固有であると評定されていた。

感情語の選択の分析 いじめ加害者と被害者それぞれを表すのにふさわしいとして選択された語の数を従属変数として、2（対象：加害者・被害者） $\times$ 2（感情の種類：1次的・2次的） $\times$ 2（感情価：肯定・否定）の分散分析を行なった。その結果、対象の主効果（ $F(1, 100) = 5.66, p < .05$ ）、感情の種類の主効果（ $F(1, 100) = 140.47, p < .01$ ）、感情価の主効果（ $F(1, 100) = 523.74, p < .01$ ）がそ

れぞれ有意であった。また、対象×感情の種類の変異作用 ($F(1, 100) = 83.94, p < .01$)、対象×感情価の変異作用 ($F(1, 100) = 89.50, p < .01$) が有意であった。さらに、対象×感情の種類×感情価の2次の変異作用も有意であった ($F(1, 100) = 20.04, p < .01$)。

単純変異作用の検定の結果、すべての単純変異作用が有意であった（肯定群における対象×感情種類の効果: $F(1, 200) = 91.07$ 、否定群における対象×感情種類: $F(1, 200) = 9.19$ 、1次的感情における対象×感情価の効果: $F(1, 200) = 109.17$ 、2次的感情における対象×感情価の効果: $F(1, 200) = 37.93$ 、加害者における感情種類×感情価の効果: $F(1, 200) = 5.58$ 、被害者における感情種類×感情価の効果: $F(1, 200) = 14.10$ 、すべて $p < .05$)。

選択された感情語の数を比較すると、1次的感情語は被害者よりも加害者に対して多く帰属されていたが、2次的感情語では逆に、加害者よりも被害者に対して多く帰属されていた（図1）。したがって、いじめの加害者が被害者よりも下等人類化されると予測した仮説1は支持されたと見ることができる。

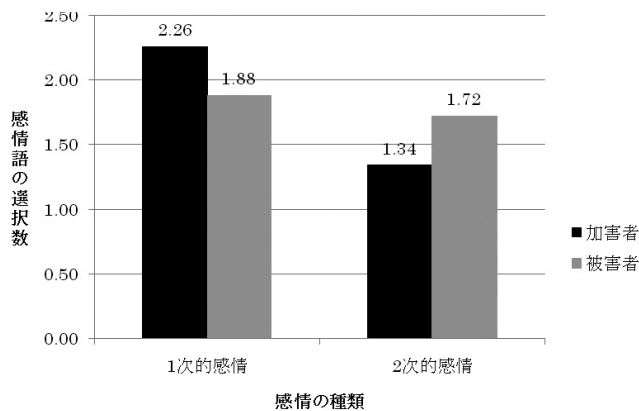


図1 対象人物と感情の種類条件ごとの感情語の選択数

考察

研究1では、下等人類化の指標によっていじめの加害者と被害者の人物像を比較した。その結果、1次的感情と2次的感情の帰属が、いじめ加害者と被害者では有意に異なっていたことが示された。下等人類化の指標である2次的感情の帰属によって比較すると、より非人間化されていたのは加害者の方であった。被験者はいじめを悪とする一般的な道徳規則を人物像の形成時に適用し、加害者を自分とは異なる存在とみなした結果、加害者への非人間化が生じたと考えられる。

研究1の結果から、感情の帰属という下等人類化の指標は、有害行為の加害者と被害者を識別可能であることが示された。ただしそれは、有害行為においてつねに加害者が非人間化されるという意味ではない。Bandura (2002) が述べているように、組織的残虐行為では被害者の非人間化が数多く報告されている。しかもそれは加害者によってなされるとは限らず、周囲の第三者によって非人間化されることもあり、残虐行為を促進する要因となる (Levi, 1986; Staub, 1990a)。したがって

重要なのは、本研究のような日常的なイメージのレベルでは、非人間的行為を行なう者が下等人類化される傾向にあるにもかかわらず、状況の変化によってそれが逆転し、被害者が下等人類化されてしまうという点であろう。いずれにせよ下等人類化の指標は両者のちがいを把握できるものであることが本研究から示唆された。

研究2

目的

研究2では、Haslam (2006) で提唱された動物化と機械化の区別をもとに、いじめ関与者（加害者・被害者・傍観者）の人物像をイメージさせ比較する。これによって、それぞれの人物像が人間らしさの2側面（UH: 人間に固有の特徴, HN: 人間的性質）から見てどのようなちがいを示すかを検討する。

方法

被験者 静岡県内の私立大学学生108名（性別不明）

要因計画 3（対象：いじめ加害者・被害者・傍観者）× 2（非人間化の種類：動物化・機械化）× 2（感情価：肯定的・否定的）要因計画。すべて被験者内要因であった。

質問紙の構成 研究1と同様に、質問紙は第1ページに全体的な説明が書かれており、第2ページに評定課題が配置されていた。評定対象となる人物を「いじめる人」「いじめられる人」「傍観しているクラスメート」という見出しで示し、その後に20個の特性語を呈示した。その20語が、それぞれの対象人物のイメージをどの程度表していると思うかについて、「1:まったく表していない」～「6:非常によくあらわしている」の6件法でたずねた。特性語は、Haslam et al. (2005) と Laughnan & Haslam (2007) の実験で用いられた語から、動物化に対応するUH語10語と機械化に対応するHN語10語を選んだ。それぞれの語群は肯定語と否定語を同数含んでいた。UH・肯定語は「寛大な・謙虚な・マメな・礼儀正しい・几帳面な」、UH・否定語は「冷酷な・慎重な・非常な・粗野な・浅はかな」、HN・肯定語は「好奇心が強い・親しみやすい・楽しいこと好きな・社交的な・お人好しな」、HN・否定語は「攻撃的な・注意散漫・せっかちな・嫉妬深い・神経質な」であった。

手続き 心理学関連科目の授業中に質問紙を配布し、後日回収した。教示はすべて質問紙上に書かれていた。

結果

実験に協力した108名のうち、記入に不備のあった4名分のデータを除外し、104名のデータを分析に用いた。

特性語群の信頼性 実験に用いた特性語（UH語・HN語）について、対象人物ごとに信頼性係数（Cronbachの α ）を算出した。その結果、加害者では $\alpha=.60$ （UH）、 $\alpha=.75$ （HN）、被害者では $\alpha=.73$

(UH) , $\alpha = .79$ (HN), 傍観者では $\alpha = .71$ (UH) , $\alpha = .72$ (HN) であった。加害者のUH語で信頼性係数が低めとなったが、他の語群はほぼ満足できるものであった。以後の分析ではすべてのデータを分析に用いることにした。

動物化と機械化の分析 対象人物ごとに各特性語群の評定平均値を算出し、それに対して3（対象：加害者・被害者・傍観者） $\times$ 2（非人間化の種類：動物化・機械化） $\times$ 2（感情価：肯定的・否定的）の分散分析を実行した。その結果、対象の主効果 ($F(2, 206) = 40.16, p < .01$) , 非人間化の種類の主効果 ($F(1, 103) = 9.14, p < .01$) , 感情価の主効果 ($F(1, 103) = 15.60, p < .01$) がそれぞれ有意であった。また、対象 $\times$ 非人間化の種類の交互作用 ($F(2, 206) = 73.38, p < .01$) , 対象 $\times$ 感情価の交互作用 ($F(2, 206) = 110.02, p < .01$) , 非人間化の種類 $\times$ 感情価の交互作用 ($F(1, 103) = 49.39, p < .01$) もそれぞれ有意であった。さらに、対象 $\times$ 非人間化の種類 $\times$ 感情価の2次の交互作用も有意であった ($F(2, 206) = 82.92, p < .01$)。

仮説2を検証するために、対象 $\times$ 非人間化の種類の交互作用の検定を行なったところ、動物化における対象の単純主効果 ($F(2, 412) = 106.42, p < .01$) , 加害者における非人間化の種類の単純主効果 ($F(1, 309) = 126.45, p < .01$) , 被害者における非人間化の種類の単純主効果 ($F(1, 309) = 39.31, p < .01$) がそれぞれ有意であった。機械化における対象の効果と、傍観者における非人間化の種類の効果は有意ではなかった（それぞれ、 $F(2, 412) = 2.05$; $F(1, 309) = 0.03, n.s.$ ）。加害者はHNよりもUHを低く評定されていたのに対して、被害者は逆にUHよりもHNが低く評定されていたことは、加害者が相対的に動物化されていたのに対して、被害者は機械化されていたことを意味する。そして傍観者に対してはこのようなかちがいが見られなかった（図2）。したがって、仮説2は支持された。

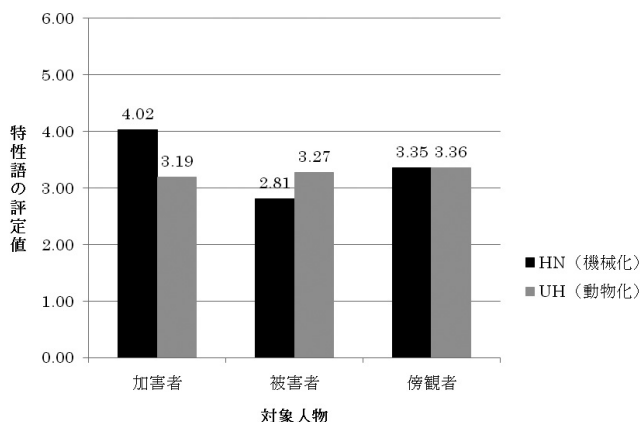


図2 対象人物ごとの特性語の評定値
評定値が低いほどその特性が低く非人間化されていることを示す。

考察

研究2では、Haslam (2006) による動物化と機械化の研究にもとづいて、いじめの加害者と被害

者、および傍観者の人物像を比較した。その結果、いじめの加害者と被害者は、非人間化の様態が対照的であった。加害者は人間に固有の性質（UH）が低く人間的性質（HN）が高く評価されており、相対的に動物化されていた。それに対して、被害者はUHが高くHNが低く評価されており、自律性が低く不活発であるような、機械化された人物像であった。傍観者にそのようなちがいは見られなかった。

研究1では加害者だけが非人間化（下等人類化）されていたにもかかわらず、研究2では被害者も非人間化されていた。指標が異なるためこれは当然だが、具体的には次のように理解できる。Haslam（2006）は、Leyensらの下等人類化の理論が扱っている非人間化を、動物化に相当するものであると述べている。したがって、研究1で加害者の下等人類化が見られことは、研究2で動物化が生じていたことと矛盾していない。そして被害者の非人間化は、機械化の視点によって人間的性質（HN）を評価した時にはじめて顕在化したのであろう。

本研究において、被害者の人物像が機械化される傾向であったという結果は、いじめ被害者を不活発で自律的な意志が低い人物とみなす一般的傾向があることを示唆する。そしてそれは、深谷（1996）の調査結果とも一致している。深谷によると、被害者はいじめられても仕方がないと子どもたちが思うような弱点や特徴をもっていると認識されており、その弱点は4つの因子で構成されていた。その第1因子（弱者因子）は、「おとなしい」「逆らわない」などを特徴とするものであった。これらの特徴が、本研究で見出された機械化された被害者像にきわめて類似していることは明らかであろう。機械化は、先行研究で抽出された被害者像の中核をなす特徴、あるいは典型像であると考えられる。

傍観者に対しては、動物化と機械化いずれの指標にも顕著なちがいは見られなかった。このことから、被験者が自分の立場を傍観者に近いものと位置づけて人物像を形成していたことが示唆される。

まとめと今後の課題

本研究では、組織的有害行為の研究で指摘されている「被害の軽視」という問題を、非人間化の研究を手がかりとして検討することを試みた。組織的有害行為としていじめをとりあげ、加害者と被害者の人物像を、下等人類化および動物化と機械化の指標によって比較した。その結果、非人間的行為を行なっている加害者が人間らしさを低く見積もられるだけではなく、被害者もまた不活発で温かみを欠いた機械のように非人間化されていることが示された。

組織的有害行為の研究では、成員が被害を抽象的に認識しているために行為の有害性が見落とされ、軽率に実行されてしまう可能性が示唆されている。本研究でいじめ被害者の人物像が機械化、すなわち不活発で温かみがないと認識されていたことは、有害行為の被害が抽象化されるひとつの具体例を示しているように思われる。機械化された他者に対して、有害行為を抑制するような共感的感情は生じにくいであろう（Pizarro, 2000）。

では、そのような抽象化を抑制することは可能なのであろうか。効率性の追求は多くの組織にとって不可欠であり、行為の適度な細分化を要請する。Grossman (1995) が戦闘行為について行なった分析を典型として、高度で複雑な分業が行為の対象や結果を実感しにくくなることは多くの研究が指摘するところである。近代社会論は、それを非人間化の問題として論じてきたが（たとえば Montagu & Matson, 1983; 塚原, 2000）、心理学の領域でそのような研究は深められていないように思われる。したがって現時点では、抽象化の抑制が可能かどうかを判断することはできないように思われる。効率性の追求とその実現が組織の内外で先鋭化させる問題に目を向けていく必要がある。

最後に、本稿の冒頭でとりあげた体系的認知との関連を考察しておく。Eder & Rothermund (2008) が主張したように、動作と認知との関係は固定的ではなく、動作の意味づけによってその影響は変化する可能性がある。本研究では、漸進的攻撃と非人間化の相互促進的過程の中に体系的認知現象を見出せるのではないかと考え、その予備的検討のために非人間化の指標を日本語化し有効性を確認する作業を行なった。その結果、非人間化の指標は日本においても有害行為の加害者と被害者を識別できることが示された。今後は、漸進的攻撃がこの指標にどのような変化をもたらすのかを検討する必要がある。

引用文献

- Arendt, H. (1963). *Eichmann in Jerusalem. A report on the banality of evil*. 大久保和郎（訳）（1969）
イェルサレムのアイヒマン 悪の陳腐さについての報告 みすず書房.
- Bandura, A. (2002). Selective moral disengagement in the exercise of moral agency. *Journal of Moral Education*, 31, 101-119.
- Bargh, J.A., Chen, M., & Burrows, L. (1996). Automaticity of social behavior: Direct effects of trait construct and stereotype activation on action. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 230-244.
- Bar-Tal, D. (1990). Causes and consequences of delegitimization: Model of conflict and ethnocentrism. *Journal of Social Issues*, 46, 65-81.
- Bauman, Z. (1989). *Modernity and the holocaust*. Cambridge: Polity Press. 森田典正（訳）（2006）
近代とホロコースト 大月書店.
- Brinöl, P. & Petty, R.E. (2003). Overt head movements and persuasion: A self-validation analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 1123-1139.
- Cacioppo, J.T., Priester, J.R., & Berntson, G.G. (1993). Rudimentary determinants of attitudes. II: Arm flexion and extension have differential effects on attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 5-17.

- Castano, E. & Giner-Sorolla, R. (2006). Not quite human: Infrahumanization in response to collective responsibility for intergroup killing. *Journal of Personality and Social Psychology*, 90, 804–818.
- Darley, J.M. (1996). How organizations socialize individuals into evil-doing. In D.M. Messick and A.E. Tenbrunsel (Eds.), *Codes of conduct: Behavioral research into business ethics* (pp.13–43). New York: Russel Sage Foundation.
- Eder, A.B., & Rothermund, K. (2008). When do motor behaviors (mis) match affective stimuli? An evaluative coding view of approach and avoidance reactions. *Journal of Experimental Psychology: General*, 137, 262–281.
- Förster, J., & Strack, F. (1996). Influence of overt head movements on memory for valenced words: A case of conceptual–motor compatibility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 421–430.
- 深谷和子 (1996). 「いじめ世界」の子どもたち：教室の深淵 金子書房.
- Gaunt, R., Leyens, J-P, & Demoulin, S. (2002). Intergroup relations and the attribution of emotions: control over memory for secondary emotions associated with the ingroup and outgroup. *Journal of Experimental Social Psychology*, 38, 508–514.
- Grossman, D. (1995). *On killing : The psychological cost of learning to kill in war and society*. New York: Little Brown. 安原和見 (訳) (2004) 戦争における「人殺し」の心理学 筑摩書房.
- Hamilton, V.L. & Sanders, J. (1999). The second face of evil: Wrongdoing in and by the corporation. *Personality and Social Psychology Review*, 3, 222–233.
- Haslam, N. (2006). Dehumanization: An integrative review. *Personality and Social Psychology Review*, 10, 252–264.
- Haslam, N., & Bain, P. (2007). Humanizing the Self: Moderators of the Attribution of Lesser Humanness to Others. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 33, 57–68.
- Haslam, N., Bain, P., Douge, L., Lee, M., & Bastian, B. (2005). More human than you: Attributing humanness to self and others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 89, 937–950.
- 神村栄一・向井隆代 (1998). 学校のいじめに関する最近の研究動向—国内の実証的研究から— カウンセリング研究, 31, 190–201.
- Kawakami, K., Phillips, C. E., Steele, J. R., & Dovidio, J. F. (2007). (Close) Distance makes the heart grow fonder: Improving implicit racial attitudes and interracial interactions through approach behaviors. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 957–971.
- Levi, P. (1986). *I sommersi e i salvati*. Torino: Giulio Einaudi editore. 竹山博英 (訳) (2000) 溺れるものと救われるもの 朝日新聞社

- Leyens, J.P., Paladino, P.M., Rodriguez, R.T., Vaes, J., Demoulin, S., Rodrigues, A.P., & Gaunt, R. (2000). The emotional side of prejudice: The attribution of secondary emotions to ingroups and outgroups. *Personality and Social Psychology Review*, 4, 186-197.
- Leyens, J.P., Rodriguez, R.T., Rodrigues, A.P., Gaunt, R., Paladino, P.M., Vaes, J., & Demoulin, S. (2001). Psychological essentialism and the differential attribution of uniquely human emotions to ingroups and outgroups. *European Journal of Social Psychology*, 31, 395-411.
- Loughnan, S., & Haslam, N. (2007). Animals and androids – Implicit associations between social categories and nonhumans. *Psychological Science*, 18, 116-121.
- Milgram, S. (1974). *Obedience to authority - An experimental view*. New York: Harper & Row. 岸田秀 (訳) (1980) 服従の心理－アイヒマン実験 河出書房新社.
- Montagu, A., & Matson, F. (1983). *The dehumanization of man*. New York: McGraw-Hill. 中野収 (訳) (1986) 「非人間化」の時代 TBSブリタニカ.
- 森田洋司・清永賢二 (1994). 新訂版いじめ－教室の病い－ 金子書房.
- 中井久夫 (1997). いじめの政治学 中井久夫 (著) アリアドネからの糸 みすず書房pp.2-23.
- Neumann, R., & Strack, F. (2000). “Mood contagion” : The automatic transfer of mood between persons. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 211-223.
- Niedenthal, P.M., Barsalou, L.W., Winkielman, P., Krauth-Gruber, S., & Ric, F. (2005). Embodiement in attitudes, social perception, and emotion. *Personality and Social Psychology Review*, 9, 184-211.
- Opatow, S. (1990). Moral exclusion and injustice: An introduction. *Journal of Social Issues*, 46, 1-20.
- Pizarro, D. (2000). Nothing more than feelings? The role of emotions in moral judgment. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 30, 355-375.
- Semin, G.R. & Smith, E.R. (2008). *Embodied grounding: Social, cognitive, affective, and neuroscientific approaches*. New York: Cambridge University Press.
- Staub, E. (1989). *The roots of evil – The origin of genocide and other group violence*. New York: Cambridge University Press.
- Staub, E. (1990a). Moral exclusion, personal goal theory, and extreme destructiveness. *Journal of Social Issues*, 46, 47-64.
- Staub, E. (1990b). Genocide and mass killing: Cultural – societal and psychological origins. In H. T. Himmelweit & G. Gaskell (Eds.), *Societal psychology*. California: SAGE Publications.
- Strack, F., Martin, L.L., & Stepper, S. (1988). Inhibiting and facilitating conditions of the human smile: A nonobtrusive test of the facial feedback hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 768-777.

鈴木康平 (2000). 学校におけるいじめの心理 ナカニシヤ出版.

塚原史 (2000). 人間はなぜ非人間的になれるのか 筑摩書房.

Vaes, J., Paladino, M.P., Castelli, L., Leyens, J-P., & Giovanazzi, A. (2003). On the behavioral consequences of infrahumanization: The implicit role of uniquely human emotions in intergroup relations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 1016-1034.

Viki, G.T., & Abrams, D. (2003). Infra-humanization: Ambivalent sexism and the attribution of primary and secondary emotions to women. *Journal of Experimental Social Psychology*, 39, 492-499.